

第16講

論説・評論(2)―指示語

要點整理

内容説明問題においては、「それ」「その」「そうして」などの指示語が指している内容を直接問う内容説明問題、また、指示語を含んだ文脈において、指示語の内容把握を前提として傍線部全体の意味内容を把握させる内容説明問題も頻出である。

- ・傍線部「この……」とあるが、それはどのような「……」か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
- ・傍線部「ここでは……」とあるが、何がどうだというのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① 原則として、指示語の直前から前へさかのぼってその指示内容を探す。ただし、指示語が段落冒頭部にある場合は直前の段落にまでさかのぼる。またごくまれではあるが、指示語の後にその指示内容が示される場合がある。
 - ② 指示内容を見つけたら、それを指示語と置き換え、前後の文脈がうまくつながることを確認する。
 - ③ 端的に短い語句を指す場合もあるが、一文全体あるいは段落全体を指す場合もあるので、指示内容を慎重に見極める必要がある。後者の場合、中心となるキーワードをおさえることが大切。それをもとに選択肢を吟味する。
- 指示語の問題はセンター試験での頻出問題であり、今後とも出題が予想される。内容説明問題に限らず設問箇所傍線部のなかに指示語が含まれている場合は必ずその指示内容を確認しておこう。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私の少年の頃は、手まわしの蓄音機で、一枚毎に針を換えながら、両面で十分あまりのSPレコードをかけるのがふつうであって、電気蓄音機などを持っているのは特権階級と言ってよかった。だが、戦後になって、手まわし蓄音機は姿を消し、SPはLPへ、LPはCDへと急速に姿を変えた。そのことによって、扱い方の点でも、音質の点でも、思いもかけぬほどの進歩が見られるのである。

だが、このことが、レコードとの関係を次第に稀薄なものにしていったように感じられる。かつて、おさない私は、貧弱で分解力の弱いSPレコードに耳をすりつけるようにして、その奥にあるものを何とか聴きとろうとした。△が、今や、レコードそのものが、われわれの努力の大半を代行してくれている。特に聴覚を緊張させようと試みなくても、

演習問題 A

NINQ

読解のポイント

(1) 指示語の種類

指示内容	近称	中称	遠称	不定称
指示	これ	それ	あれ	どれ
代名詞	ここ	そこ	あそこ	どこ
連体詞	この	その	あの	どの
副詞	こう	そう	ああ	どう

また、「前者」「後者」「両者」なども指示語に含まれ、その内容が問われることがある。

そのほかに、「もう一つは……」とあるが、『もう一つ』に対する最初の『一つ』とは何かといった設問も、広い意味で指示語の問題といえる。

(2) 傍線部中に指示語が含まれている設問では、その指示内容を把握すること

で選択肢が絞れる場合が少なくない。

(3) 指示語の内容把握は文章読解の基本である。たとえ設問で問われていなくても、指示語があったら、その指示内容を確認することを心がけよう。

重要語句

レコードの方で、精密に分解され再現された音を、われわれの耳に運んでくれる。かくして、われわれの耳は、おのずから、受け身の、怠惰なものとなるのだ。

耳とは正直なもので、このような怠惰は直ちに習慣的なものとなる。たとえば私は、他のことをしながら音楽を聴くのを好まぬ方だが、何しろ生来の音楽好きだから、つい誘惑に負けて、本を読んだり原稿を書いたりしながら、音楽を流すことがある。結局、仕事にも注意が集中せず、音楽もよく聴いていないという情けないことになる。だが、このことはまだいい。おそろしいのは、短時間でも、こういう「ながら族」になると、たちまち耳からその集中力が失われるということだ。仕事が終わって、音楽だけに集中しようとしても、さまざまな雑念が入りこんで来て、かつての状態に戻るのとは容易なことではないのである。つまり耳が、生理的に、怠惰で受け身な状態に戻ろうとしていることがよくわかるのである。オーディオ装置やレコードの質の向上が、このような怠惰を一般的な状態と化したとすれば、これは容易ならぬ事態へと通ずるのではなからうか。

レコードに関して、いまひとつ着目すべき点は、その曲目のおどろくべき拡大である。かつてわれわれが聴きえたのは、ドイツ・オーストリア音楽を中心とするヨーロッパの近代音楽が大半だったのだが、戦後、いわゆるバロック・ブームが生じた。次いで、ルネッサンス音楽、中世音楽へとその範囲がひろがった。さらに、これまでは、せいぜい音楽史でその名前を見る程度の、時には名前さえのつていないような、さまざまな作曲家の作品がレコード化されるに到っている。こんなふうに時間的にひろがるばかりではない。世界各地の民族音楽が大変な規模でレコード化されている。東京において世界各国の料理を味わうことが出来るように、もしその気になれば、居ながらにして、時間的にも空間的にも、ありとあらゆる音楽をおのれの音楽室に現前させることが出来るのだ。

これは何ともせいたくな話であって、これまで人びとが望んでえられなかったことなのだが、このように何でも味わうことが出来るようになったために、自分の好きな料理がなくなってしまうというようなことが起こる。味わえば味わうほど欲求不満がつのるというようなことが起こる。どれほど多くの知人もただひとりの友人に及ばないように、あれこれと音楽を聴けば聴くほど音楽そのものは遠ざかる。そういう意味では、膨大な音楽経験も、ただ一曲の愛聴曲に及ばない。近頃再びブームになった観のある美術全集にも、さまざまな文学全集にも、用い方をあやまれば、人びとをこわい危うい場所へ導きかねない危険がはらまれていると言わなければならない。美術全集の場合、複製美術の進歩にしても、それがとりあげる対象のひろがりにしても、私のおさな頃を思えば、まことに今昔の感がある。文学全集の場合も事は同様だ。だがそのことによつて人びとは、好きな絵にも好きな文学作品にも、真に出会うことが困難になっている。すべては、真に会う理由もなく真に別れる理由もない。かりそめの出会いに過ぎないのだ。

そしてこのことは、単に特殊な部分的な現象に留まっていはいない。これは現在の文化の特質と深く結びついているのであって、それだけにこういう時代的傾向に逆らうことは何とも厄介なことだ。様式の欠如こそ現代の様式だという意味のことを言った批評家がいるが、これは、われわれが周囲を見まわせば直ちに気付くことだろう。たとえば銀座などへ行けば、ありとあらゆる様式の建築を見ることが出来る。またたとえば、超近代的なビルの屋上に、小さな稲荷の社などが、特別の違和感もなくおさまっている。またわれわれの生活を見ても、米と味噌汁と漬物の朝食をすまして、

◇おのずから自然と。

◇怠惰Ⅱなまけて、だらしない様子。

◇生来Ⅱ①生まれつき。②生まれてからずっと。

◇現前Ⅱ現在、目の前にあること。目の前に現れていること。

◇つるⅡ①だんだん強さが増す。②募集する。

◇今昔の感Ⅱ昔と比べて、今のあまりの変わりように驚く様子。

◇かりそめⅡ①その場限りであること。

②ちよつとしたこと。

◇欠如Ⅱあるべきものがかけていること。

つとめ先の近代的なビルにOutline、昼食にはそばを喰い、夜はレストランで西洋料理を喰い、帰宅したあとはゆかたでくつろぐなどというのは、誰しもがごく自然に行っていることだ。まったくこれが当たり前になっていて、誰もこれをふしぎとは思わない。それどころか、或る様式に統一された生活を強いられれば、誰しも息が詰まったような思いをすることだろう。①

② 歴史を通じていつもこうだったわけではない。それどころか、これこそ現代の特質なのである。フランスならフランスの或る時代の家具や食器や衣裳などを見れば、それがどの時代のものであるかはすぐわかる。そしてそれが、同時代の文学や音楽や美術などの特質と深く相通していることもすぐわかる。そう言えば、昔、車で、フランスのブルターニュ地方を旅行していたとき、あの地方独特の家々に見られる、前の方にのめりかかったどこか重苦しい屋根の形を眺めながら、記憶のなかの何かに似ていると感じたことがある。それが何であるかなかと思いつかなかったのだが、やがて気が付いたのは、その屋根の形が、ゴーギャンが描いているブルターニュの女たちの、伝統的な白いかぶりものにそっくりであるということだった。何でもない発見なのだが、屋根とかぶりものとのこのようにアナロジーはまことに面白く、しばらくは昂奮がおさまらなかつたものだ。そして、このような強く統一した様式のなかで人びとがおくる生活と、そういう生活のなかで人びとが内側にあみあげている心のありようについてあれこれ思いをめぐらせたものだ。

③ 様式の統一性と言えば、昔、ギリシアのヒドラ島を訪ねたとき、その町のありようにひどく驚いたことがある。その建物は、青く塗られた窓枠などをのぞけば、すべて漆喰で、まっ白に塗りあげてある。建物ばかりではない。建物のあいだの細い路までが、漆喰で部厚く塗りかためてある。白への偏執とでも言うべきものがそこにはあつて、私は何とも異様な思いをした。私は、船着き場近くの土産品屋に群れている他の観光客から離れて、初夏の強い光に照らされて白く輝く、誰ひとり人かげを見かけぬ森閑とすまりかえつた町のなかを歩きまわっていたのだが、時間の消えた白い夢のなかにでもいるように思われたのである。こんなところで暮らしたらどんなものだろうなということばが心に浮かんだが、ほとんど反射的に息のつまるような閉塞感が感じられ、私はこういう自分の反応にいささか驚いた。そして、自分、現代の文化の様式の欠如に、いかに深いところまで染めあげられているかということに改めて思い知つたと言つていい。

④ 現代の文化のこのような様式の欠如、このような無秩序は、先に触れたようなさまざまな危機的な結果を生んでいるが、だからと言って一挙に様式と秩序に戻るなどということは、ほとんど不可能であり、性急にそれを実現しようとしたりすれば、⑤ 別種の、さらに危険な結果を導くことになりかねぬ。われわれのあの欲求不満は、欲求を満たすものを限りなく求め続ける一方、おのれのそのような動きの不毛性を感じ続けているだけに、おのれを拒む様式や秩序に関してまことに無警戒であり、かくしてそれらによつて足をすくわれることになる。放蕩家こそ、狂信的な克己主義者になりかねないのであり、そこには新たなファシズムの根がつけねに存在するのである。

⑥ というわけだから、われわれは、現代の様式の欠如や無秩序を一挙に拒否し否定するのではなく、このような現代のありようの構造と、言わばその生理とでも言うべきものを、徹底的に見定める必要がある。⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

◇息が詰まる①呼吸が苦しくなる。②息苦しいほどに緊張する。

◇偏執③偏つた考えに強くとらわれ、他人の意見を受け入れないこと。

◇閉塞④閉じてふさぐこと。ここでは、閉じこめられたような息苦しさを「閉塞感」と表現している。

◇性急⑤せっかちなこと。気が短いこと。

◇ファシズム⑥指導者に対する絶対的服従を強制する、全体主義的な政治体制。

ミイラとりがミイラになる危険をはらんでいるが、こういう作業を抜きにしては、結局のところ、様式とか秩序とかい
う抽象的で感傷的な観念をでっちあげるのが落ちだろう。様式や秩序の発明は、現代のありようの構造と生理とに關する危うさははらんだ見定めに即して、それをふまえながら、ゆつくりと忍耐強く行わなければならないのである。

そのためにまず必要なのは、性急に、様式や秩序に向かうことではない。現代の膨大な情報量という、何ともつかみどころのない、危険な腐蝕力をはらんだ力に耐えながら、具体的な何かに出会うことだろう。この力は、われわれから、刻々に他者という存在を奪い去るように働いているわけだが、絵でも音楽でも文学でも、また人間でもいいが、具
体的な何かに出会い、それと密接に結びつき融けあうことによってはじめて、この力を、われわれにとつての可能性へと変容させることが出来るだろう。

(粟津則雄「世紀末文化私観」による)

(注) SP、LP…ともにレコードの略称。LPはSPに比べて収録時間が約六倍であり、音質・音量ともにすぐれている。

ゴーギャン…フランスの後期印象派の画家(一八四八—一九〇三)。

アナロジ…類似。

克己…自分の欲望にうちかつこと。

問一 — 線① — このことが、レコードとの関係を次第に稀薄なものにしていったように感じられる」とあるが、これはどのような意味か。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア レコードの質的向上は、オーディオ装置の進歩とあいまって、扱いの点でも音質の点でも飛躍的な恩恵をわれわれにもたらした反面、音楽を聴くという行為から主体性を失わせてしまったということ。

イ オーディオ装置が扱い方の点でめざましく進歩したことは、いつでもどこでも手軽に聴けるという音楽享受の新たな可能性に道を開いた反面、聴くという行為がなかなかに習慣化したために、その新鮮さが失われてきたということ。

ウ レコードとオーディオ装置の普及と利便性の向上は、特権階級のみが享受することのできた音楽を身近なものにする契機となった反面、音楽を聴くという行為に対する執着心を失わせてきたということ。

エ オーディオ装置の急速な質的向上は、操作に関する煩雑さから解放してくれるという恩恵をもたらした反面、よりよい音を獲得するために装置に工夫を加える熱意を奪い、聴き手を受け身にしてしまったということ。

オ オーディオ装置が音量や音質の点で思いもかけぬほど進歩したことは、聴き取りやすさの点ではわれわれに多大な恩恵をもたらした反面、繊細な音を聴き分ける耳の機能をおとろえさせてしまったということ。

「 」

問二 — 線② — これは現在の文化の特質と深く結びついている」とあるが、これはどのような意味か。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア われわれの芸術鑑賞を支える技術の進歩は、さまざまな様式を取り入れて急速に発展してきた現代文化の一面

◇ミイラとりがミイラになる①人を連れ戻しに行った者が、そのまま先方に留まってしまふ。②説得しに行った者が、相手に言いくるめられ、相手と同じ意見になってしまふ。

ヒント

△指示語の内容、および傍線部全体の内容説明を求める設問。「この」の内容を第一段落に戻って把握する。

△問一と同様。指示内容の説明と、内容の説明を同時に求めている。「これ」については、前の二段落、「現在の文

であるということ。

イ われわれが芸術作品を深く味わえなくなっているのは、現代文化の雑多な様式の混在が日常化してしまった結果であるということ。

ウ われわれが芸術作品に感じる欲求不満は、現代文化の様式の欠如・無秩序が作品に反映していることにもとづくということ。

エ われわれが芸術鑑賞において享受しうる作品対象のひろがり、統一の様式を持たない現代文化のもたらした恩恵であるということ。

オ われわれが芸術作品に対する真の感動を失っていることは、あらゆる様式が併存する現代文化へのとまどいを意味しているということ。

問三 「フランスのブルターニュ地方を旅行していたとき」と「ギリシアのヒドラ島を訪ねたとき」に筆者が受けた印象が記された一つの体験談は、どのような働きをしていると考えられるか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア ブルターニュ地方とヒドラ島においてさまざまな事物や現象間にアナロジーを発見するという筆者の体験と心象にもとづいた記述は、現代において様式が欠如していることを鮮明にする働きをしている。

イ ブルターニュ地方とヒドラ島における様式の統一にかかわる体験の記述は、統一された様式が思いもかけぬほど重苦しい気分を筆者にもたらしたことを強調する働きをしている。

ウ ブルターニュ地方で屋根と女たちのかぶりものとの結びつきを発見し、ヒドラ島での白への偏執に気づいたという記述は、様式の統一性の問題が大きなスケールを持つことを浮き彫りにする働きをしている。

エ ブルターニュ地方とヒドラ島において統一された様式に衝撃を受けた体験の記述は、様式の欠如と統一という問題が簡単に説明できるものではないことを暗示する働きをしている。

オ ブルターニュ地方の体験談からヒドラ島の体験談へと連想的に展開する記述は、現代における様式の欠如が筆者自身にも浸透しているという事実を再認識したことを印象づける働きをしている。

「 』

問四 —線③「別種の、さらに危険な結果を導くことになりかねぬ」とあるが、これについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 現代の文化的状況における様式の欠如や無秩序を克服しようとするあまり、安易にこれまでの枠組みに飛びついてしまう危険性があるので、何よりもまず現状をしっかりと見極めることが重要だと考えている。

イ 多様な価値観が同時に存在しうる状況を性急に整理しようすると、それに対する態度を絶対的な他者にゆだねてしまう危険性があるので、自分の鑑識眼を信じて評価を下すことが重要だと考えている。

化の特質」については、傍線部のある段落にそれぞれ着目して、内容を特定する。

△第七、第八段落の終わりで述べられている、それぞれの体験が筆者に与えた印象や感想に着目。

◇心象Ⅱ心の中に現れる像や姿、イメージ。

△傍線部以下の内容を把握し、筆者の主張をおさえる。筆者は、様式、秩序の性急な回復を拒否している。

ウ　さまざまな様式が混在する現代の文化的状況に安住していると、我々の欲望は際限なくふくらんでいく危険性がある。まず目の前にある対象を味らい尽くすことが重要だと考えている。

エ　個人では処理しきれないほどの膨大な情報量は、相対的に一つ一つの情報の価値を小さくしてしまう危険性がある。それぞれの情報を持つ価値を忍耐強く吟味していくことが重要だと考えている。

オ　様式や秩序のさまざまな結びつきが見られる現代では、目の前の対象をこれまでの概念では説明しきれなくなる危険性があるので、これに対して新しい様式を発明することが重要だと考えている。

問五　この文章で、筆者はどのように論旨を展開しているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア　現在と過去の事例を対比することで現状にひそむ問題を指摘し、それを出発点として日本と外国を対照的にとらえる見方を提示した後、表面的な多様性の裏に普遍的な秩序が存在している可能性があることを主張している。

イ　具体的事例を連鎖的に展開しながら、鍵になる筆者の考えを提示した後、これと一見対立するとさえ思える筆者自身の経験を対比的に示した上で、それが実際には筆者の主張を多少変更することで説明できることを述べている。

ウ　身近な具体例に則して現状を把握し、これを一般的な傾向としてとらえなおした後、筆者自身の経験からその一般的な傾向が根深いものであることを述べ、現状を変えていくための方法と注意すべき点について言及している。

エ　冒頭にあげた具体例から筆者の意見をあらかじめ明らかにし、その意見をさらに筆者自身の海外での経験によって裏づけた後、一般的な観念に抽象化することによって現状に対する普遍的な主張と警告を行っている。

オ　さまざまなジャンルにおける事例から現代の文化の普遍的な傾向を取り出し、それに対する警鐘を鳴らした後、海外でもすでに同様の傾向が見られるようになっていくことを指摘し、それを克服するための方法を探っている。

△本文全体の構成を問う設問。筆者の体験談から始まり、現代文化の問題点、およびその対策へと論旨を展開させている点をとらえる。

◇警鐘を鳴らす＝危険やよくない事態に向かっていることを告げ知らせる。